産経新聞
平成28年（2016）日刊26574号
12|20［火］
産業経済新聞（サンケイ）
THE SANKEI SHIMBUN
発行所 ©産業経済新聞大阪本社 2016
〒556-8660 大阪市浪速区湊町2-1-57
☎ 大阪（06）6633-1221（大代表）

アイディアが土地を活かす
TakaMatsu 髙松建設
0120-53-8101

朝の詩（うた）

胸ポケット

広島県東広島市　藤田　誠　72

胸ポケットは
飾りものにも似て
いつもは忘れられがち
しかし
ふとした折りに
手に握りしめた
小さな大切なものを
胸ポケットに
忍ばせて
心の胸ポケットには
夢と情熱を
そっと
忍ばせて

（選者　新川和江）

は地元への対応の再考を迫られることになった。

＝3面に「政府誤算」、9面に「世界の高速炉開発は」、29面に「会議4回のみ」

福井県敦賀市の高速増殖炉「もんじゅ」（本社ヘリから）

高速増殖炉もんじゅをめぐる政府と地元・福井県の対応

	政府	福井県
9月21日	原子力関係閣僚会議：菅義偉官房長官が「廃炉を含め抜本的見直しを行う」と表明	事前に地元説明がなかったと反発
11月25日	もんじゅ関連協議会：福井県が高速炉開発の中核になるよう求める	地元の意見反映を求める
12月19日	もんじゅ関連協議会：もんじゅ廃炉方針を伝達	「到底受け入れられない」方針の見直し求める
年内	原子力関係閣僚会議：もんじゅの廃炉、代替高速炉の開発方針決定	？

戦後71年　楠木正成考

恩賞で離反　赤松円心の計算

〈第10部〉「私」で生きる武将たち①　「公」を忘れた日本人へ

〈公家の輩、二ヶ国、三ヶ国給はりけるに、さしもの軍忠なりける赤松入道円心には、佐用庄一所を行はれて、播磨の守護職をば幾程なくして召し返されてけり〉

公家に厚く、武家に薄い建武政権の恩賞の顕著な例として『太平記』は赤松円心（則村）を挙げる。そして、こう書き継ぐ。

〈されば、建武の乱に、俄（にわ）かに円心心替はりして、朝敵になりたりしも、この恨みとぞ聞こえし〉

鎌倉幕府に反旗を翻して後醍醐天皇に味方し、後には天皇を見限って足利尊氏に付いた武将は数多い。その先陣を切ったと言っていい武将が円心である。

「建武政権では赤松一族が浮上する余地はなく、領地も保証されない。そうした現実的な計算が円心に働き、尊氏を選ばせたのだろう」

兵庫県立歴史博物館の前田徹学芸員はそう話す。

円心が、尊氏への忠誠と巧みな交渉術を見せるのは、九州に逃れた尊氏を追討するために派遣されてきた6万の新田義貞軍を播磨に迎えた時である。

「恐らくは第一の忠功とこそ存ぜしに、恩賞の地、降参不義の輩よりも、なほ卑しく候ふ間、一旦の恨みによつて、多日の大功を棄て候ひき」

義貞にそう申し送って、播磨守護職の地位を保証する綸旨（りんじ）をもらえるなら官軍に味方すると恭順の意を示した。義貞は京に使いを送り、十日余りかけてその手続きを取ったところ、円心はあざ笑った。

「手の裏を翻すやうなる綸旨をば、何かは用ゐ候ふべき」

義貞は激高し、円心の籠る白旗城（兵庫県上郡町）を自ら執拗（しつよう）に攻撃し続けた。義貞はここで、貴重な約50日間を空費した。

「白旗城は、当時の主要ルートだった山陽道沿いにある城ではない。九州に向かう新田軍にとって、どうしても攻略しなければならない必然性はなかった」

兵庫県教委文化財課の山下史朗副課長はそう語る。

当時の円心の手勢は800余りだった。『太平記』が記す逸話は、自らの利益になると考えて頂いた大将には、命がけで働く円心の姿を伝えている。

円心と楠木正成は、建武政権樹立までは似た軌跡をたどっている。少数の兵力で決起し、鎌倉幕府の大軍と戦い、船上山（鳥取県）から京に還幸する後醍醐天皇からは兵庫で、同様のお褒めの言葉を賜った。にもかかわらず、2人のその後を分けたものは何だったのか。前田学芸員は、天皇との距離感と見る。

「正成は、笠置山で後醍醐天皇と対面するなど、天皇と個人的なつながりがあった。円心は、三男の則祐（もりすけ）が護良親王（もりよししんのう）に従って幕府軍と戦うなど、親王との縁がより深かった」

円心が播磨守護職を失うのは、護良親王の失脚と前後した時期だ。その後、尊氏が反旗を翻すと、尊氏を支え続け、赤松一族は室町幕府で侍所長官を担う四職（ししき）の家柄となる。

◇

建武の新政の崩壊は、いったんは後醍醐天皇に付いて鎌倉幕府を倒した武将の多くが、足利尊氏に従ったことで起こった。当時の武将らの行動や価値観から、楠木正成の「義」について考えたい。

円心が新田義貞の大軍と戦った白旗城跡＝兵庫県上郡町（恵守乾撮影）

赤松円心（あかまつえんしん）

宝林寺に残る赤松円心坐像

鎌倉末期～南北朝時代の武将。本名は則村で、円心は出家後の法名。播磨国佐用庄（兵庫県佐用町）を拠点に、鎌倉幕府が京都に置いた出先機関、六波羅探題の下で活動していたとされる。

元弘3（1333）年、護良親王の令旨に呼応して挙兵。六波羅探題を攻め落とし、建武政権で播磨守護職に任じられたが、後醍醐天皇と護良親王の対立が深まるにつれ、護良親王派と目され、播磨守護職を解任された。その後は、後醍醐天皇に背いた足利尊氏に臣従。兵庫県上郡町の宝林寺には、木像の円心坐像が伝わる。

「楠木正成考」冊子（前編）を販売中
1500円（税込み、送料別）
産経新聞開発 ☎06・6633・6062

地元抜き議論　政府に不信感

19日のもんじゅ関連協議会で、政府の廃炉方針案を拒否した福井県の西川一誠知事が強い反発を示した背景には、政策を強引に進める政府への不信や、廃炉作業での安全確保に対する懸念がある。政府は年内決着を目指すが、福井県との調整不足は否めないのが実態だ。

政府が廃炉を含めた見直し方針を9月21日に提示した際にも事前の説明はなく、地元の不信感は高まった。松野博一文部科学相が同日夜、福井県庁を訪れ、西川知事、渕上隆信敦賀市長に方針を伝えたが、西川知事は「地元に全く説明がないまま考え方が示された。国の裏切りと思われても不思議ではない」と猛烈に批判。渕上市長も「ばかにされている気がする」と厳しい言葉で同調した。

西川知事はもんじゅの廃炉まで30年を要する作業に、原子力規制委員会に運営主体に不適と評価された日本原子力研究開発機構が携わることにも疑問を示す。

福井県は事故やトラブルで停止した原発の再稼働に当たり、有識者による専門委員会で安全の検証を行うなど安全確認を徹底してきた。ナトリウム漏れ事故を起こしたもんじゅが平成22年5月、14年5月ぶりに再稼働した際も、慎重な手順を踏んで同意した経緯があり、政府の一方的な廃炉方針決定に反感を持つ一因となっている。西川知事は「規制委から運営が不適格

豪など4カ国　首相、来月12～16　訪米時期は調

安倍晋三首相は、来年1月12～16日の日程を軸にオーストラリア、ベトナム、フィリピン、インドネシアを歴訪し、各国首脳と会談する方向で最終調整に入っ